

これまでも穴を掘る機会は数多くあったし、なんせ川と池を掘ったこともある。少々、石があつてもそれをスコップで彫りあげることも慣れてきていた。ところが駐車スペースは碎石を一メートル近く積み上げたところで、とにかくスコップが刺さらない。たまたま妻の実家の物置を片付けた時に出てきたツルハシを興味本位でもらつてきたのが役にたった。これが無ければブドウの生垣は諦めていたことだろう。

まず、生垣の大きさを決めなければならないのだが、ブドウを植える間隔は二メートル。少なくとも一・五メートルは必要ということだったのと、碎石を積んだところとそうでないところの高低差を行き来しやすいように駐車スペースの中間に階段をつくつていたことから、必然的に六メートルというあまり長くないものに落ち着いた。幅は根をそこそこはれるスペースを確保すると六センチメートルということだった。深さは四十センチメートル。体積にすると一・五立法メートル程度なのだが。

しつかり踏み固めた碎石を掘るのは容易ではない。まず、ツルハシを打ち込み固まつた碎石をほぐしていく。それをスコップですくっていく。それを何度も何度も繰り返して穴にしていくという地道で力のある作業だ。「ブドウの生垣、ブドウの生垣」と念仏のように唱えながらひたすらツルハシをふるいスコップですくつても、なかなか穴らしい深さになつてこない。でも、こういう作業は塵も積もれば山となるの言葉通り、いつかは目標に達する。わたしが長年かわつてきたまちづくりなどは、確実に一步一步進むということは殆どなかった。いろいろな要素が複雑に絡み合い、目指す目標に向かって努力はしても進んでいるのか、足踏みしているのか、はたまた後退してしまっているのかはつきりしないことも多くあつた。それに比べると、その都度の成果は微々たるものだけれど、それを黙々と繰り返すことによつて着実に目標に近づいてくるのを目にすることができるのは快感でもあつた。体力的に半日作業を限度としたが、それでも一日五十センチメートルくらいの長さの穴が掘れる。二日で一メートル。休みも入れて一週間でなんとか目標の大きさの穴を掘りあげることができた。

つぎは、その穴に水はけの良い火山礫と、黒土と腐葉土を混ぜながら埋めもどす作業になる。腐葉土はホームセンターで買つてくればそれまでだが、なんせ敷地にはタダで積もっている落ち葉が膨大にある。それをかき集めて運んで埋める作業を繰り返す。掘るのもたいへんだけど、埋めもどすのも結構体力を使った。それでも雪が降るまでにはなんとかブドウの苗を植ええられる環境が整つてきた。あとは、頒布会のある来春のゴールデンウィークを待つだけだ。

妻はブドウの生垣をつくるのにさほど反対はしなかったが、どうせ碎石だらけのところブドウを植える穴を掘れるとは思つていなかったのかもしれない。それでも、「これで、我が家はお金がなくなつてもお酒には不自由しないよ」と、つまらん冗談を言つて妻の気持ちが変わらないように祈つていた。

